

2023年3月 口語詩句選評

龍 秀美

<3月選評>

日常のなかにこの時代特有の現象が強烈に現れるこの頃です。日々の生活はあふれる情報に混とんとしていますが、そのなかに潜んでいる未知の世界が即時的に姿を見せる、ある意味では非常に「文学的」な時代という気がします。今月はテーマもスタイルもバラエティに富み、多様な作品のなかから数を絞るのに苦心しました。

月光に開くピアノの翼

長谷川柊香 宮城県

——過不足ない美しさ。

花曇り

幼い母の

写真のよう

桜咲 千葉県

——花曇りはすべてのものを懐かしくする。まして幼い日の母となれば。

永日の予算の少ないサメ映画

立花ばとん 東京都

——とりあえず時間を潰すための映画の比喻として秀逸。最近の味気なく安っぽいもろもろも。

ホームセンターを掃討してゆけば

やがて夜景の景に至れる

からすまあ 神奈川県

——「ホームセンター」というありふれた現実が、やがて心理的な景色になるまでの経緯を「掃討していく」というフレーズが納得させてくれる。

丁寧に軍手を干して海女の午後

奎いう子 佐賀県

——己の肉体をかけがえのない道具とする海女にとっては、同じく相棒の道具である軍手も愛情をこめて丁寧に干す。身体の仕事と存在の自然な一致。

嫁入りは鯨に吞まれゆくように

奎いう子 佐賀県

——嫁入りという古い言葉は相変わらず普通に使われている。一見近代化されたように見えても習俗だけは変わることのない日本の共同体はあぐりと開けた鯨の口だ。

Wi-Fi が無い店が

無い

しゃぼんだま

山本先生 東京都

——Wi-Fi があるのは今やフツウの情景。電波は目に見えず、捉えどころのないしゃぼん玉のようにふわふわと。

一人でも

上手く歩けると

知っていて

誰かと生きる歪さは愛

いまはじまるの 兵庫県

——結婚という制度や他者との共棲とは何だろう。それが「愛」という、よく分からない呼び名なら、なお更に葛藤を生む。

くつろいで

ほつれる眼差し

零れゆく光よ、

私をひらいてくれ。

こはくいろ 大阪府

——くつろぐ、ほつれる、零れる、そしてひらく。時間軸に沿った自然な動きが美しい。

福島原発事故って言うなよ
勝手に区切りをつけるなよ

加藤 万結子 愛知県

—ひとつの事件が、時が過ぎるとただの熟語になってしまう。個々の生々しい体験ではなく、単なる記号として片付けられ、歴史として区切られてしまう怖さ。

日常は日常のままで
明後日の朝に息子は
我が家を巣立つ

加藤 万結子 愛知県

—息子の巣立ちという母にとっては大きな「事件」も「日常」という時間のなかではあまりにもさりげなく過ぎていく。この作者は時間と事象との関係に敏感だ。

屋根裏に知らない桃を置いてみる

あなたにとって外側の恋

夢眠 東京都

—「知らない桃」は作者自身か。その最も深い部分か。相手にとっては全て「外側」なので、傷つき易い最も深い部分は「屋根裏」に置くしかない。

春の海指と指の隙間みている

土田 真央 滋賀県

—春の海は穏やかさの象徴だが、作者は遮蔽物としての指の隙間からしか見る事ができない。自分を預けきることの困難さだろう。

桜しか咲かない国の奨学金

にしざわゆうと 福井県

——「サクラサク」と祝われた出発も奨学金返済の重荷が待っている。

ぼくたちは

落下しながら探してる

一番星になれる夜空を

汐見りら 東京都

——誰もがみつけることができるはずの一番星。しかし今という時代はそれも落下しながら探さねばならない心もとなさだ。

うるせーな

アヴェ・マリアで殴るぞ

秦 大地 東京都

——「アヴェ・マリア」という優しさの権化で殴るという。反転すれば痛烈な皮肉になるだろう。

敬礼をしてよ等しく凍蝶へ

有野 水都 東京都

——救いがたく凍てついた世の中。それでも健気にそれぞれの空を飛ぶ凍蝶の姿や哀れ。

刃渡り21センチの承認欲求

涼木 和貴 北海道

——誰でもいいから人を刺してみたかったなどという殺伐な事件が多い。それは恐らく哀し

く歪んだ承認欲求の表現なのだろう。